

『梅切らぬバカ』

2021年／日本／和島香太郎監督作品

梅切らなくていいじゃない？

会員 酒井 圭 (62期)

趣味「映画鑑賞」と言えるほどではないが、長女が生まれるまで、月1本程度は映画館で新作を楽しみ、パンフレットは必ず買って書棚に並べていた。長男も生まれ、仕事に家庭に忙しさは増すばかり。もっぱらNetflixなどの動画配信サービスにしがみつくように、映像作品を見る日々だ。それでも、年に1回は映画館に足を運びたいと思い、年末に1日だけ、何とか「映画の日」を確保している。昨年末も、今年は何を見ようかと思案していたところ、SNSに流れてきた「梅切らぬバカ」の記事に目が止まった。塚地武雅さん演じる自閉症の中年男性「忠さん」と、加賀まりこさん演じる母珠子さんの日常を描いた作品で、全国に上映館が広がっているという。「今年はこれだ」と思った。

「梅切らぬバカ」は、忠さんが朝目覚めるシーンから始まる。決して、深刻なトーンではなく、かといってコメディでもない。「平熱」くらいの温度感というのが適当だろうか。塚地さん演じる忠さんの特徴的な動きやこだわりを見せる姿には、リアリティがあった。私自身、自閉症の方と長時間接した機会はなく、書籍やドキュメンタリー番組から得た知識がある程度なので、本当に「リアル」であるのか判断することはできない。しかし、自閉症の方の日常を想像するに十分な、緻密かつ自然な演技だったと思う。驚いたのは、作品の中で、「自閉症」という言葉が一度も使われなかったことだ。自閉症についての説明的な台詞も一切ない。このような演出は、忠さんという1人の人物を、その個性のままに受け入れる社会であって欲しい、というメッセージなのかもしれない。

物語は進み、珠子さんは、自分の死後を考え、忠さんをグループホームで生活させることを決断する。しかし、忠さんは、近隣とのトラブルで、結局退去を余儀なくされてしまう。忠さんを理解し支える人々が描かれる一方で、地域住民からメガホンで批判される場面もあり、きれい事だけの作品ではない。

タイトルにある梅の木は、2人が暮らす自宅の庭にあり、枝が柵からはみ出して隣家の通行を妨害している。この枝を切るのか切らないのか。引っ越してきたばかりの隣家の家族は忠さんの変わった振る舞いを警戒し、梅の木も邪魔もの扱い。作中では、徐々にその家族と忠さんとの距離が縮まり、その家の子どもと忠さんとの友情めいたものも育まれる。「桜切る馬鹿、梅切らぬ馬鹿」とは、樹木の剪定はそれぞれの木の特性に従ってしなければならないことを示唆する言葉だという。最後まで切られることのない梅の木は、型どおりではない忠さんという人物が、隣り合う家との間にある小さな社会に受け入れられたことの象徴なのだろう。この作品にクライマックスらしいクライマックスはなく、ふっと日常の中に消えていくように幕が閉じる。まるで、忠さんのいる日常が私たちの生活する日常と繋がっているかのようなラストシーンは、秀逸だった。

自閉症に限らず、社会には多様な個性がある。その多様性を受け入れるためには、想像力が不可欠だが、一方で人間の想像力には限界があるのが難点だ。この作品には、その想像力をそっと底上げしてくれるような、そんな力があつた。

『梅切らぬバカ』
DVD & Blu-ray 発売中
価格：DVD 4,290円(税込)
Blu-ray 5,280円(税込)
発売元：株式会社ハビネット
ファントム・スタジオ
販売元：株式会社ハビネット・
メディアマーケティング
©2021『梅切らぬバカ』フ
ィルムプロジェクト

